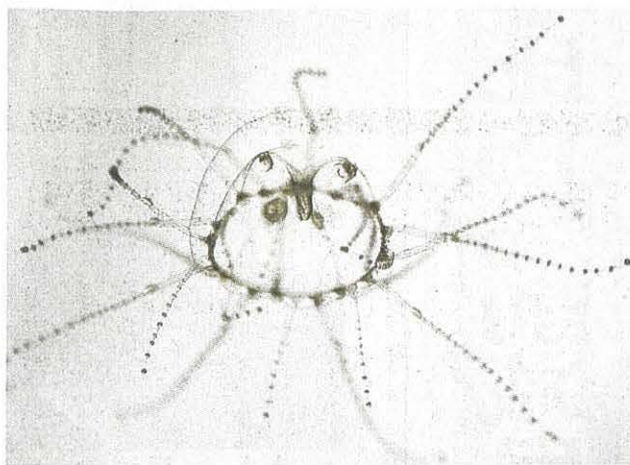


コモチカギノテクラゲ



コモチカギノテクラゲは、主に海藻に付着して生活する小型のヒドロクラゲである。

久保田 信

67



△ クローンクラゲをつくっているコモチカギノテクラゲ (河村真理子博士撮影)

ククラゲ芽を無性的に出芽する特徴があつて、未成熟なクラゲの時期にたくさんクラゲをつくる。実際には「子ども」ではないが「コモチ・カギノテ」の和名が付いた。放射管は4

しかし、同じ仲間のカギノテクラゲのように刺胞毒の危険性は少ない。このような生態であるため、プランクトンネットびきでは、まず捕れることはない。
傘径は、通常、数ミリ程度だが1センチ近くまで成長するものもある。触手は56本まで見られ、平衡胞は16個までしかなく、カギノテクラゲと比べて少ない。

本あり、それぞれが傘の中央にある胃腔部と接続する付近の4カ所に、それぞれの場所で複数のクラゲ芽を形成する。画像の個体でもその4カ所にクラゲ芽が少数だが形成されているのが分かる。クラゲ芽のどれもまだ小さい。このクラゲ芽を形成する部分に、成体になると楕円(だえん)体の生殖巣が形成される。

コモチカギノテクラゲはわが国では本州から九州にかけて記録され、インドー太平洋、大西洋、地中海まで広く分布するとされる。日本産ではまだポリプは確認されていない。外国産でみると、やはりクラゲの形が似ているカギノテクラゲに類似する。

ポリプは単体性で小さいため、野外ではめったに見つからない。クローンづくりもフルスチュールという「蠕虫状」で海底をはうものを無性的に次々とつくって増える。このポリプからクラゲを遊離させるタイミングが決まっていって満月に合わせるとの報告もある。(京都大学准教授)